

スピノザ『エチカ』における人間本性の型

小田 裕二朗

1. はじめに

『エチカ』における完全不完全 *perfectio et imperfectio* および善悪 *bonum et malum* とはなんら実在的なものではない。自然は神の本性の必然性から生起し (E1P16)¹、また、自然は何らの目的も立てずに生起する (E1Ap)。しかし、すべての自然物が自分たちと同じように目的のために働いているということ、そして神自身がすべてをある一定の目的に従って導いているということ (ibid.)、人々のこのような偏見 *praejudicium* から善悪のような偏見も生じたとしている。人間は生起する一切が自分の為を生起するものと思ひ込み、「彼らを最も快く刺激するものをすべて最も価値あるものと評価しなければならなかった。ここからして彼らは物の本性を説明するために善、悪、秩序、混乱、暖、寒、美、醜のような概念を形成しなければならなかった」(ibid.)。しかし、これらの概念は本来、決して物の本性に属さない。我々が、外部物体によって何らか刺激を受けるとき、その外部物体について我々が有する観念はその物の本性よりも我々の身体の状態をより多く示している (E2P16C2)。同様のことが第4部序言においても述べられている。「善悪に関して言えば、それらもまた、事物がそれ自体で見られる限り、事物における何の積極的なものも表示せず、思惟の様態 *modus cogitandi*、すなわち我々が事物を相互に比較することによって形成される概念 *notio*、にほかならない」(E4Pr)。

しかし一方で、『幾何学的秩序によって証明されたエチカ *Ethica ordine geometrico demonstrata*』というタイトルに示される通り、『エチカ』とは倫理学に関する研究の書である。スピノザは価値や秩序を破壊して、倫理的なものを一切否定しようとしているのではない。むしろまったく逆に、「我々はこれらの言葉 *vocabula* を保存しなくてはならない」(ibid.)と述べる。「なぜなら、眺め

るべき人間本性の型として、人間の観念 *idea hominis tanquam naturae humanae exemplar, quod intueamur*² を形成することを我々は欲望している *formare cupimus* ので (ibid.)。この人間本性の型によってスピノザは完全性および善悪を以下のように再定義する。

善とは我々が我々の形成する人間本性の型にますます近づく手段になることを我々が確実に知るものであると解するであろう。これに反して、悪とは我々がその型に一致するようになるのに妨げとなることを我々が確実に知るものであると解するだろう。さらに我々は、人間がこの型により多くあるいはより少なく近づく限りにおいて、その人間をより完全あるいはより不完全と呼ぶであろう (E4Pr)。

スピノザは価値を事物の相互比較によって判断する手法を第1部の付録や第4部の序言などで幾度も批判してきた。特に第4部の序言において、一般的観念としての型 *exemplar* を案出し、これを自然物に適用して完全不完全と評価することを「事実に基づくよりも偏見に基づいている」と批判している。しかしそういった批判をしたうえでスピノザはまた型という言葉を持ちだして完全性や善悪という言葉を保存しようとしている。それならばこの人間本性の型は通常人間が用いる型とは全く違う仕方で完全性や善悪の尺度として働いているのでなければならないだろう。本稿ではこの人間本性の型という概念とはいったい何であるか考察し、スピノザ倫理学を解釈するうえで新たな視座を与えることを目的とする。

最初におおまかな見通しを立てておく。2節では『エチカ』における観念形成について論じる。3節では人間本性についての考察と、2節で考察した内容をもとに、いかにしてこの型が形成されるかを検討する。4節ではより具体的に型を形成するとはどういうことか、そしてどこでこの型が形成されているのかを探り、この型の内実とその役割を明らかにしたい。

2. 『エチカ』における一般概念の扱い

スピノザは「眺めるべき人間本性の型としての人間の観念を形成する」と述べる。『エチカ』においては、観念は「精神が形成する思念 *conceptus*³」と定義されているが、スピノザが思念という言葉を使うのは、これが精神の能動 *actio* を示すからだという (E2Def3)。ところで、通常「人間」「馬」「犬」といったような一般概念 *notio universalis* とは、精神が一度に表象しきれないほど多くの表象像、たとえば多くの人間を表象し、もはやその些細な違いやそれら人間の数を表象しきれなくなったとき、ただそれらの人間全体の一致点を「人間」という名前 *nomen* で表現し、これを無数の個人について述べるようになる (E2P40S1)、と、こんな具合で形成される。しかし、このような概念はそれぞれの人間の経験に依存して形成されるため、それぞれ人間の経験が異なるにつれ形成される一般概念も異なる⁴。当然こうした一般概念の形成は精神の能動ではなく、受動であろう。このように、各人の漠然たる経験を基礎として形成する概念をスピノザは「悪しく基礎づけられた」(E2P40S1)概念であると述べる。こうして個々人がさまざまな仕方で一般概念を形成するため、この悪しく基礎づけられた一般概念、あるいは型を用いて完全性や善悪の評価をすることをスピノザは「物の真の認識に基づくよりも偏見に基づいていること」(E4Ap)としているのである。

スピノザはこのように漠然とした経験による一般概念の形成の手段を第一種の認識と呼んでいる (E2P40S2)。しかし、一般概念の形成は理性すなわち第二種の認識と呼ばれる手段でも形成される。それは「我々が共通概念あるいは事物の特質の十全な観念を有することから」(ibid.)形成される一般概念である。人間本性の型が、第4部の序言で述べられている通り、価値の確実な尺度として用いられているのであれば、そのような各個人が漠然とした経験に応じて勝手に形成するような一般概念ではなく(そして故にそれは虚偽の原因でもある (E2P41))、必然的に真である第二種の認識によって形成される一般概念でなければならない (ibid.)⁵。それならば、共通概念あるいは事物の特質の十全な観念を有することから一般概念を形成するとは一体どういうことなのだろうか。

それは証明によってである。共通概念とは「すべての物に共通であり、そして等しく部分の中にも全体の中にもあるもの」(E2P37)であり、例としては「す

すべての物体は運動しているか静止しているかである」(E2P13A1)などが挙げられる。そしてこの共通概念は『エチカ』において推論 ratio の基礎とされている (E2P40S)。なぜならば、共通概念は普遍的であるが故に十全としか考えられないのだが (E2P38D)、十全な観念から帰結する観念もまた十全としか考えられないからである (E2P40)。たとえばスピノザは、このような共通概念を基礎とした一般概念の形成の例としてユークリッド幾何学の証明を挙げている (E2P40S2)。また、スピノザは『エチカ』におけるいくつかの箇所では、その証明を普遍的 *universalis*⁶ であるとしている (e.g. E1P21D, E2P46D)。したがって、『エチカ』における論証とは、理性、すなわち「共通概念あるいは事物の特質の十全な観念」から一般概念を形成するというにほかならないのである。『エチカ』は幾何学的な証明によって一般概念の形成をしているのである。そうだとしたら、人間本性の型という観念もまた、証明によって構成されなければならないだろう。

3. 人間本性の型と欲望

人間本性という言葉は『エチカ』において欲望として位置付けられていると考えられる。スピノザは「欲望 *cupiditas* は各人の本性ないし本質そのもの *ipsa uniuscujusque essentia, seu natura* である」(E3P56D, E3P57D) というように述べており、また次のことからスピノザが人間本性という言葉で欲望を指しているということが伺える。

この努力 *conatus* (自己の有 *esse* に固執しようと努める努力) が精神だけに関係する時には意志と呼ばれ、それが同時に精神と身体とに関係する時には衝動 *appetitus* と呼ばれる。したがって衝動とは人間の本質そのもの、—— 自己の維持に役立つすべてのことがそれから必然的に出て来て結局人間にそれを行わせるようにさせる人間の本質そのもの、にほかならない。次に衝動と欲望との相違とはいえば、欲望は自らの衝動を意識している限りにおいてもっぱら人間について言われるというだけのことである。このゆえに欲望とは意識を伴った衝動であると定義することができる (E3P9S, 括弧

内は筆者)。

そして、ここにおいて欲望は普遍的な人間本性として把握される。理性によって、すなわち概念として把握されるのである。もちろん、各個人の欲望は各個人の本性が異なるだけ異なっている(E3P57S)。あるいは欲望の定義にある通り、同じ人であっても時間の経過によってある物が善くなったり悪くなったりするかもしれない(E3AD1)。しかし、人間が人間である限り、すなわち物resである限り、物は必ず自己の有に固執するよう努力する(E3P6)のだから、このような努力、あるいは欲望は各個人の本性に応じて異なっているとすると、人間本性としての努力は「すべての人間に共通のいくつかの観念あるいは概念」(E2P38C)である。なぜならばそれは、論証を通じて、「おのおのの物は自己の及ぶかぎり自己の有に固執しようと努める」(E3P6)と、あらゆるものの普遍的な本性として概念化されているからだ。では、人間本性の型は、この誰もが明瞭判然と知覚できる概念(ibid.)、すなわち「共通概念あるいは事物の特質の十全な観念」(E2P40S2)を基礎として形成されるのではないだろうか。というのも、前節で確認した通りそのような働きはまさに理性だからだ。

しかし、それならば我々の欲望するものは無条件的に善であると言えるのだろうか。もちろんそうではない。『エチカ』では欲望はふたつにわけられる。能動と受動である。前者は「我々の本性のみによって理解されるような仕方では我々の本性から生ずる」のに対して後者は「人間の能力によってではなく、我々の外部にある諸事物の力によって規定されなければならない」(E4Ap2)。我々の能動であるところの欲望は常に善であるのに対して、その他受動である欲望は善でも悪でもありうる(E4Ap3)。何が善で何が悪かを確実に知ること、我々の能動が何を欲望するかを知ることなのである。

また、何が善であり何が悪であるかは個人に相対的であるから(E1Ap, E4Pr)、したがって、あるものが「我々にとって有益であると我々が確実に知る *certo scimus nobis esse utile*」(E4Def1)ためにはそれぞれの個々の本性や、我々が十全な認識を持つことができない外部物体⁷を考慮に入れてはならない。人間本性の型とはすべての人間に共通な本性である欲望概念を基礎として形成され、我々にとっての善悪を論証によって規定するのである。理性はすべての物に共通な

ものを説明するが個的本質は説明しない(E2P44C2)。「我々にとって有益であるものと我々が確実に知るもの」(E4Def1)は我々の共通の本質であるところの欲望から規定される。

では、努力あるいは欲望を基礎として人間本性の型を形成するとしたら、それは具体的にはどうやって形成されていくのだろうか。次節において検討する。

4. 型の形成と内在的規範

1675年のチルンハウス宛書簡においてスピノザは、起成原因 *causa efficiens*⁸ を表現している定義あるいは観念からは、その観念対象の特質 *proprietas* のすべてが導かれる *deducere* としている(EP60)⁹。たとえば、「円は一点が固定し他点が動くひとつの線によって画かれる空間である」という観念は、円の起成原因を表現しているので、円のすべての特質がそこから導出される。人間本性の型を我々の努力あるいは欲望を基礎として形成するとはまさに、ものの起成原因を表現した観念からそのもののすべての特質を導出することに他ならない。努力とは「我々の精神の第一にして主要 *primum, et praecium* なもの」(E3P10D)であり、「徳 *virtus* の第一にして唯一の基礎 *fundamentum* である」(E4P22C)。そして、徳は次のように定義されている。

「徳と力 *potentia* とを同一のものと私は解する。言いかえれば(第3部定理7により)、人間について言われる徳とは、人間が自己の本性の法則のみによって理解されるようなあることを起こす *efficere* 力を有する限りにおいて、人間の本質ないし本性そのものことである」(E3Def7)。

人間について言われる徳とは、我々が能動する力を有する限りにおける人間の本質ないし本性のことなのであるが、そういった徳の基礎が努力であるとは、そういった力の基礎が努力であるということだ。

人間の無力 *impotentia* を示し終えた第4部定理18の備考においては「今や残るのは、理性が我々に何を命ずるか、またいかなる感情が人間理性の規則と一致し、いかなる感情がこれと反対するかを示すことである」と、倫理的な実践の

問題へと明らかな方向転換が宣言されている。そこで第4部の定理19から少し先を見てみよう。定理19では「各人はその善あるいは悪と判断するものを自己の本性の法則に従って必然的に欲求しあるいは忌避する」こと、すなわち欲望が善を求めることが証明され、定理20においては「自己の有を維持することに、より多く努めかつより多くそれをなしうるに従ってそれだけ有徳である」(E4P20)ということが証明される。次いで定理21で欲望と善き生が結び付けられる¹⁰。そして、定理22の備考において、欲望が徳の第一にして唯一の基礎に据えられる。円が、「一点が固定し他点が動くひとつの線によって画かれる空間である」と定義されるように、欲望を起成原因として徳が定義されているのである。これから、有徳的に働くとはどういうことが示され(E4P23)、真に有徳的に働くことが理性と結び付けられる(E4P24)。そこから何が善であり何が悪であるか、また、理性に導かれるということがどういうことが次々と証明されていく。スピノザは第4部の最後でそれらを勇氣と寛仁に帰せられる強さ *fortitudo* の特質の証明であるとする¹¹。ところで、勇氣とは「各人が単に理性の指図に従って自己の有を維持しようと努める欲望」であり、寛仁とは「各人が単に理性の指図に従って他の人間を援助しかつこれと交わりを結ぼうと努める欲望」(E3P59S)であった。強さとはこれらふたつの欲望に帰せられているのである。この勇氣と寛仁の定義からも、欲望が徳あるいは強さの基礎となっていることがわかるだろう。

このようにして見れば、第4部定理19からの証明が人間本性の型という観念を形成している場だとは言えないだろうか。型ははじめに、それに近づかせるものが善であって云々、と名目的に定義される(E4Pr)。この時点ではその型が一体なにであるのか、その内実はわからない。しかし、ひとたび徳の基礎としての欲望、すなわち人間本性が与えられたなら、いわば強さの特質としてのその型は証明によって構成されていくのである¹²。

我々の本性の必然性から形成されるこの善悪の基準たる人間本性の型はまさに「内在的規範 *une norme intrinsèque*¹³」とでも呼ぶべきものである。スピノザの同時代人でありスピノザも多大な影響を受けたとされるホッブズも、スピノザと同様に我々が欲望するものが善であるとしている¹⁴。そのためホッブズは、精神の安息としての究極目的や最高善を否定し¹⁵、個人の倫理的な生き方を問

題にせず、道徳哲学 the moral philosophy を「人間の付き合い及び社会において何が善であり悪であるかの科学」¹⁶とした¹⁷。これに反して、スピノザは我々の共通の本性であるところの欲望概念を基礎として人間本性の型を形成し、我々にとって内在的かつ普遍的な規範を示す。スピノザは、『幾何学的秩序によって論証されたエチカ』というタイトルにふさわしく、円の発生的定義から円のすべての特質が導かれるように、徳や強さの起成原因としての我々の欲望から、その特質として内在的規範を導いているのである。

5. 結論

序文でも指摘したが、スピノザが自らの著書を『エチカ ethica』と名付けたということに注目しなければならないという指摘はしばしばなされる¹⁸。確かに『エチカ』と名付けられたこの著作は、何の序文や前置きもなしに、倫理とはあまり関係のなさそうな自己原因、実体、属性、様態といったような概念の定義からはじまっており、そのタイトル通りの内容を期待した読者は面食らってしまうかもしれない。しかし、スピノザが常に、ある事物の起成原因を与え、そこからその事物の特質を導出していく方法を取っていることに鑑みれば、『エチカ』が自己原因の定義からはじまっているのもむしろ当然であろう。翻訳者の畠中尚志の解説によると、『エチカ』は第4部から倫理学の領域に入るという¹⁹。実際、善悪や徳の定義、あるいは理性の指図についての論述は第4部においてはじめてなされており、確かにそう言えるかもしれない。しかし、『エチカ』は第1部における実体や様態についての証明や目的論的世界観の批判、第2部における理性や認識の究明、さらに第3部における感情論などはすべて理性的に働くとはどういうことかということの証明、すなわち内在的規範の形成に向っている²⁰。そして第4部の最後の定理の備考は、「しかしこれを達成するにあたって人間の徳はどの程度まで及び、そしてまた何をなしうるかは次の部で証明するであろう」(E4P73S)と締めくくられており、第5部は「最後に私は自由に達する方法ないし道程に関する倫理学の他の部分に移る」(E5Praef)という宣言とともに始められている。これらはすべて第5部において精神の真の満足へと結実する。まさしく『エチカ』におけるすべての証明は精神の真の満足に至るための

道を示すためにあったのである(E5P42S).

註

1. 『エチカ』からの引用は慣例に従い以下のように略記する。Def=定義, Ax=公理, P=定理, D=証明, S=備考, C=系, Ap=付録, Pr=序言, L=補助定理, AD=感情の諸定義。また、『知性改善論』はTIE, 『往復書簡集』はEP, 『神学・政治論』はTTP, 『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』はKVとする。
2. *intueamur*は*intueri*という動詞の接続法一人称複数であるが、この動詞の訳は訳者によってさまざまであり、あまり定まっていない。例えば工藤はこの節を「我々が人間本性の典型であると見なしてよいような人間の観念」とし、ポートルは「我々が念頭に置くことのできる人間本性の型としての人間の観念 *une idée de l'homme à titre modèle de la nature humaine que nous pouvons avoir en vue*」と訳している。本稿では日本語としてのわかりやすさを重視し畠中訳を参照した。
3. 通常 *conceptus* は概念と訳されるが、ここでは *notio* との区別を明確にするため思念と訳した。というのも、スピノザが *notio* というときは特に一般的・普遍的なものを指示しているからである。したがって、思念と言った場合は *conceptus* を指し、概念と言った場合は *notio* を指す。ただし、どちらも思惟の形態という点では観念である。また、訳語に関しては佐藤一郎訳を参考にした。
4. 「例えばよりしばしば人間の姿を驚嘆して観想した者は人間という名前を直立した姿の動物と解するであろう。これに反して人間を別なふうに観想するのに慣れた者は人間に関して他の共通の表象像を形成するであろう。すなわち人間を笑う動物、羽のない二足動物、理性的動物などとするであろう」(E2P40S1)。
5. もちろん、『エチカ』にはこれら二種の認識の他に「第三種の認識」という認識が残されているが、この認識は個の本質についての十全な認識であり、一般概念を形成するものではない。したがって、本稿の中心である人間本性の型はある個物、あるいはある個人についての認識ではないため、本稿では特に取り扱わない。
6. 訳者の畠中尚志は注で一般概念に対するスピノザの *nominal* な立場を認めつつも、*universalis* という語が妥当認識(十全な認識)に関係する場合にも用いられているということも認める。その際畠中は *universalis* を普遍的と訳しており、本稿もこれに従うが、一般的と普遍的に関しては同じ言葉をスピノザが用いていることには注意しなければならない。
7. 「人間身体のおおのおおの変状の観念は外部の物体の十全な認識を含んでいない」(E2P25)。
8. 作用因, 作動因, 作出因なども訳される。畠中尚志の注によると、スピノザにおける原因とは起成原因のことであって、これ以外の原因を認めていない。また、この語はオランダのスコラ学者であるブルヘルスダイクおよびその後継者のヘーレボールドの用法に由来しているらしく、ブルヘルスダイクは著書『論理学教程』のなかで起成原因を以下のように細別している。(1)流出原因と活動的原因, (2)内在的原因と超越的原因, (3)自由原因と自然的原因, (4)それ自身による原因と偶然による原因, (5)主要原因と補助原因, (6)第一原因と第二原因, (7)普遍的原因と特殊的原因, (8)最近原因と遠隔原因。『短論文』ではこの分類はそのまま採用されているが(KV1-3), 『エチカ』に

おいては(1)と(7)は除かれている(畠中尚志訳『エチカ』上, 第1部注20, pp. 264-265).
また、デカルト研究者である小林道夫によると、「デカルトにおいては、1630年の永遠真理創造説の表明以来、*causa efficiens*という表現に関して、とりわけ神に関して使われる場合には、この*efficere*という言葉に*facere*ないし*creare*というのと同義のニュアンスが込められているということである。「産出すなわち創造の原因」というのと同じ意味で使われているのである」(小林, p. 217).

9. 研究者の間では「発生的定義*définition génétique*」と呼ばれることもあるが、スピノザ自身が用いている言葉ではない。発想自体はホブズに由来しているというのが一般的な見解である(ホブズ『物体論』第1部第6章第13節)。
10. 「何びとも、生存し行動しかつ生活すること、言いかえれば現実に存在すること、を欲することなしには幸福に生存し善く行動しかつ善く生活することを欲することができない」(E4P21)。
11. 「このことおよび我々が人間の真の自由について示したこれと類似のことどもは強さに、言いかえれば(第3部定理59の備考により)勇氣と寛仁に帰せられる。しかし私は強さのすべての特質をここで一々証明することを必要とは思わない」(E4P73S)。
12. 『エチカ』の定義は事物の本質を説明する真なる定義ではない。むしろ定義は証明による対象の構成を、いわばそれが何であるか知らずに可能にするのである」(上野修, p. 50)。上野修はこれを第1部の定理1から定理15における実体についての証明で示している。当然これは実体だけでなく『エチカ』全般に当てはまることであり、我々が問題にしている人間本性の型もまさにこれと同じことが言える。
13. もちろん、「内在的規範」という言葉はスピノザ自身の言葉ではないが、ときどきスピノザ研究者によって用いられる言葉である。この語について、柴田健志は次のように述べる。「『規範』という規範は、現実に存在する人間の欲望に内在するものとして理解されているからである。したがって明示すべき点は、規範が個人々の欲望を超越するのではなく、むしろそこに内在するというスピノザの論理である」(柴田, pp. 2-3)。筆者もこの箇所には賛同する。またジャケールにおいても「(理性の指導のものみに生きる人間の)観念はすべての人間のうちにある。何故ならそれは共通概念であり、故に各々に内在的な方法で発達することができるから」(Jaquet, p. 85)、ということから、内在的規範と呼ばれている。だがジャケールは、理性ははまだ第三種の認識まで届いておらず、個的本質を表現していないため、このような型は完全には内在的規範を形成しないとしている(*ibid.*, p. 86)。
14. ホブズ『リヴァイアサン』第1部第6章。
15. *ibid.*, 第1部12章。
16. *ibid.*, 第1部第15章。
17. 従ってホブズ研究者のタックはこう述べる。「伝統的に、倫理問題をめぐると対立が生じたばあい、道徳哲学者としては、おそかれはやかかれ、人々は合理的に考えるようになって道徳的な事実をはつきりと理解するようになるはずだと希望するよりほかに手がなかったが、ホブズはもちろん、この種の安直な希望に訴えてすませることはできなかった。逆にかれは、政治を媒介にしてこそ合意に到達できると主張した」(リチャード・タック, p. 110)。
18. e.g. Machrey, p. 7.
19. 畠中尚志訳『エチカ』上, p. 19.
20. 実際スピノザはしばしば見られるように、必要以上の論証を嫌っている。例えば、第2部で物体について簡単に証明したあと、次のように続ける。「もし私の意図が物体につ

いて専門に論ずることにあつたとしたら、私はこれらのことをもっと詳しく説明し証明しなければならなかつたであらう。しかし、すでに述べたように、私の意図するところは別のものであり、私がこうした事柄をここに問題としたのは、私が本来証明しようとして企てたことをそれから容易に引き出し得るために他ならなかつたのである」(E2L7)。例示の1つに過ぎないが、このように第2部の物体論などもスピノザが目的とした倫理の証明のためになされたことは最早言うまでもないだろう。

スピノザの著作

Spinoza Opera, 4vol., Carl Gebhardt, Heidelberg : Carl Winters, 1925.

なお、翻訳は以下のものを参照した。

島中尚志訳『知性改善論』, 岩波書店, 1931年.

島中尚志訳『エチカ』上下, 岩波書店, 1951年.

島中尚志訳『スピノザ往復書簡集』, 岩波書店, 1958年.

工藤喜作・斉藤博訳『エティカ』, 中央公論新社, 1969年.

佐藤一郎訳『エチカ抄』, みすず書房, 2007年.

Pautrat, B. : *Ethique*, Paris : Seuil, 1988.

参考文献

朝倉友海「概念と個性—スピノザ哲学研究—」, 東信堂, 2012年.

Bennett, J. : *A Study of Spinoza's Ethics*, Cambridge University Press, 1984.

Curley, E. : "Spinoza's Moral Philosophy", in Grene, M. (ed) : *Spinoza : A Collection of Critical Essays*, University of Notre Dame Press, 1973.

Hobbes, T. : *Leviathan*, ed. Tuck, R., Cambridge University Press, 1991.

トマス・ホッブズ『哲学原論 自然法及び国家の原理』, 伊藤宏之・渡部秀和訳, 2012年.
Jaquet, C. : *Les expressions de la puissance d'agir chez Spinoza*, Publications de la Sorbonne, 2005.

小林道夫『デカルト哲学の体系 自然学・形而上学・道徳論』, 勁草書房, 1995年.

Macherey, P. : *Introduction à l'Ethique de Spinoza. La quatrième partie. La condition humaine*, Presses universitaires de France, 1997.

Matheron, A. : *Individu et communauté chez Spinoza*, Les Éditions de Minuit, 1988.

柴田健志「内在的規範の論理—スピノザの『エチカ』第四部における「人間本性の範型」—」, 『鹿児島大学法文学部紀要人文科論集』vol. 70, 2009年.

リチャード・タック『トマス・ホッブズ』, 田中浩・重森臣広訳, 未来社, 1995年.

上野修「スピノザ『エチカ』の〈定義〉」, 『アルケー』第20号, 関西哲学会, 2012年.

Youpa, A. : "Spinoza's Model of Human Nature", *Journal of The History of Philosophy* 48(1), Johns Hopkins University Press, 2010, pp. 61–76